

道明寺

世阿弥作

季は	地は	ツレ	シテ	後	ツレ	シテ	ワキ	前
九月	河内	天女	白太夫		同じく	宮人	僧尊性	

「善き光りぞと名を聞くや。 く。 仏の御寺なるら
ん。

詞
「かやうに候ふ者は。 相模の国田代と申す所に。 尊
性と申す者にて候。 我善光寺の如来に一七日参籠
申して候へば。 あらたに御靈夢を蒙りて候ふ程に。
是より河内の國土師寺へ参らばやと思ひ候。

道行
「捨てゝ早。 久しきりつる世の中を。 く。 又思ひ
立つ旅衣。 昨日の山を跡に見て。 猶行く方は白雲
く。

シテ、ツレ一聲
の。 海も見えたる西の空。 夕日隠れの霧間より。
流れも是や河内なる。 土師の里にも着きにけり。

ツレ
「長月の。 色も梢の秋を得て。 照るや紅葉の土師の
里。

ツレ
「猶晴れ残る音とてや。

二入
「松風ひとり時雨るらん。

シテサシ
「是に出でたる老人は。 此里の名も土師寺の。 仏神

に仕へ申す者なり。

二人 「有難や利生はさまぐ多けれども。わきて誓ひも陰高き。天満神の宮寺に。歩みを運ぶ御值遇。実際に身を知れば心なき。我等が為めは頼もしや。

下歌 「いざや歩みを運ばん。 く。

上歌 「神さぶる。松は十かへり千代の秋。 く。 霜を重ねて下草の。露の身ながらながらへて。神に仕へ奉る。宮路久しき瑞籬の。深き誓ひは有難や。

く。

ワキ詞

「如何に是なる宮人に申すべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「是は善光寺の如来の御夢想により。遙々当寺に参りて候。寺中の人に逢ひ申し。御夢想の様を語り申したく候。

シテ

「不思議なる事を承り候ふ物かな。まづ御夢想の様を此老人に御物語り候へ。某承つて寺中の人々へ

広め申し候ふべし。

ワキ 「あら嬉しや候。さらば委しく申し候ふべし。寺中

の人々に御広め候へ。

シテ 「心得申し候。

ワキ 「是は相模の国田代と申す所に。尊性と申す聖にて

候ふが。我念佛往生の志有るにより。此度信濃の

国善光寺へ参り。一七日参籠申す処に。如来御厨子の御戸を開き。香の衣に香の袈裟かけ給ひたる

老僧の。あらたなる御声にて。汝念佛往生の志誠に懇なり。然らば五畿内河内の国土師寺は。天神の御在所なり。彼所の神明を始め奉り。七社の神々を勧請申されたり。又天神は一切衆生現当二世の為め。五部の大乗經を書き供養して埋まれたり。其軸より木橿樹の木生ひ出でたり。其木の実を取り数珠とし。念佛百万遍申さば。往生疑ひあるまじきと承つて夢覚めぬ。なんぼう有難き御夢想

候ふぞ。

シテ
「かゝる有難き御事こそ候はね。やがて寺中の人々に触れ申し候ふべし。まづ唯今仰せられ候ふ木槧樹を見せ申し候ふべし。此方へ御出で候へ。

ワキ
「さらばやがて御供申し候ふべし。

シテ
「是に神明を始め奉り。七社の神々をいはひ申され候。又此方なるは天神にて御座候。あれに見えたることぞ。唯今御物語り候ふ木槧樹にて候ふよ

くく御拝み候へ。

ワキ詞

「有難や神も仏も同一体とは申せども。天神同意の御結縁今始めて承り候。

ツレ
「うたての聖の仰せやな。今に始めぬ天神の。弥陀一体の御值遇。天神と申すに其御本地。救世觀音にてましまさずや。

ワキ
「実にくく是は理なり。昔在靈山名法華。

シテ
「今在西方名阿弥陀。

ワキ 「娑婆示現觀世音。

シテ 「三世利益同一体。

ワキ 「其外神や。

シテ 「仏とは。

地 「唯是れ水波の隔てにて。神仏一如なる寺の名の。
道明らかに曇らぬ。神の宮寺ぞ尊き。有難しく。
實に神力も仏説も。同じ和光の影に来て。拝むぞ
尊かりける。く。

地クリ 「それ仏の昔神の今。後五の時代に至るまで。神も

濁世に応じ給ひて。暫く西都に移り給ふ。

シテサシ 「如月下の五日にして。都を出させ給ひつゝ。

地 「此土師の里に旅宿あつて。様々の御神物をとゞめ。

末代值遇の御結縁。今に絶ゆる事なし。

シテ 「かくとも留まらぬ道のべの。

地 「草葉の露もしをるゝばかり。

クセ 「君が住む。宿の梢を行くゝも。隠るゝまでに。

帰り見ぞするとの御詠め。留こそと知るぞかたじけなき。さてもいつしかに。ならばせ給はぬ旅の空。名におふ心筑紫とて。天ざかる鄙の国に。住まはせ給ひしかば。あたりは都府樓の瓦。觀音寺の鐘の声。明暮に響く折々は。都の春秋を。思し召し出でぬ時はなし。

シテ「家をはなれて三四月。

地「落つる涙は百千行。万事は皆夢の如し。よりく

彼蒼を期すといふ。其御心の至りにや。昨日は北闕に悲しみをかうぶつしたり。今日は西都に恥を清むる屍たりと。御神感あらたに。生きての恨み死しての悦び。普しや天満。陽感ぞめでたかりける。

ロンギ地

「実に有難や草も木も。く。皆成仏の木の実まで。

玉を連ぬる光りかな。

シテ「枯れたる木にだにも。誓ひの花は咲くぞかし。ま

してや面前木穂樹。花咲き実なる御覽ぜよ。

「實にや花咲き実なるなる。梢の色もあらたにて。

シテ「法を称ふる理を。

地「思の玉の。

シテ「おのづから。

地「あの梢の木の実こそ。此数珠の御法なれ。必ず授け申さんとて。帰ると見れば立ち留りて。我是天神の御使。名をば誰とか白太夫の。神と申す翁草

の。霜曇りしてけりや。霜曇りに失せにけり。(中入)

地「久堅の。天の岩戸の神遊び。今思ひ出も面白や。

地「舞楽の役役とりぐくに。く。琵琶琴和琴笛竹の。夜は更け行けども缶の役者。などや遅きぞ白太夫。急いで出でよと待ち給ふ。

後ジテ「月もかゝやく宮寺の。常の灯明々たり。

天女「如何に白太夫の神。七社の御前に韓神催馬楽。うたふや缶笏拍子の。役とは知らずや白太夫。

シテ詞

「仰せは重く候へども。既に名にだに白太夫が。星霜積る老が身の。役をば免し給ふべし。

ツレ「いやとよ其役定まりたり。急いで役をなすべきなり。

シテ「さては辞すとも叶ふまじ。さて其役は。

ツレ「韓神催馬楽。

シテ「庭火の影や。

ツレ「朱の玉垣。

地「かゝやける其中に。白太夫が小忌の袖より。取るや笏拍子とうくと。打つも寄るも老の波の。雪の白太夫が。缶の笏拍子は面白や。(樂)

シテ「唯今かなづる舞歌の曲。

地「唯今かなづる舞歌の曲。七徳双調七拍子。膝を屈して仏を敬ひ。さす腕には魔縁を払ひ。をさむる手には寿福を招き。千秋楽には民を養ひ。万歳楽には命を延ぶる。法の筵を敷妙の。枕は袂。上は

尊き木穂樹の。梢に翔りて降るや一味の。雨風を
そゝぎて枝々より。木の実を振ひ落して。彼尊性
に与へつゝ。これこそ思の玉を貫く。数は百八煩
惱の。数は百八煩惱を。かたどる数珠の。道明寺
の鐘鼓に。神楽の夢は覺めにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第四輯」大和田建樹著